

海外漁業ニュース No.13

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 海洋水産資源開発センター 公開日: 2025-07-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://fra.repo.nii.ac.jp/records/2014835

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.





海外漁業ニュース

1983.12
No.13

海洋水産資源開発センター

〒102 東京都千代田区紀尾井町3番27

(剛堂会館ビル6階) ☎(03)265-8301~4

南アフリカ西岸水域のアンチョビーの群形成と回遊.....	1
チリーの水産事情.....	6

アロツナスは価値ある漁業対象になろう.....	12
世界のマグロ漁業の現状.....	13

南アフリカ西岸水域のアンチョビーの群形成と回遊

(出典: The South African
Shipping News and Fishing
Industry Review, 1983年2月号)

まえがき

南アフリカ西岸では例年強く吹く南西の風が、過去2年間止まっており、この異常気象により南アフリカ沖の浮魚の資源は、かつて経験したことのない安定した状態が続くものと期待されている。

アフリカ西岸では、アンチョビーの若年魚の南下回遊群のうち、毎年10%しか漁獲されず、親魚の大型資源がアフリカ南岸域で育成されると言われている。このような浮魚資源の実態については、科学的な立場で詳細な調査を行なった上で、資源評価を行なうことが大切である。

本 論

環境・漁業副大臣 John Wiley 氏の要請により、南アフリカ沿岸における夏期の浮魚資源状況について検討が行なわれ、諸現象が解明された。

この検討では、アンチョビーの群形成、回遊、習性等について行なわれた。

Wiley 氏の要請に応じて、漁業関係者は、調査結果の分析や漁場における実際の経験等

によって、浮魚資源の解明に努めている。

今年の漁獲割当量は、漁獲努力量の減少や、工場の製造能力に合わせて水揚げ調整などが行なわれたにもかかわらず、豊富な資源量により、かつてなく容易に達成できた。

このことは、アンチョビー資源は非常に安定しており、漁獲強度に対しても充分堪え得る豊富なものであると考えられ、毎年の漁獲量は総資源量のほんの一部と考えられる。

このことから、海洋には資源量の増大を促す、親魚となる大量の加入群が蓄積されているものと推論される。

漁業研究所は貴重な調査を行ない、業界もこれを高く評価しており、一方経験の深い漁業者が行なった調査結果の科学的な分析と評価も進んでいる。このような多くの調査結果は、資源の現状に関する正確な推定や海洋環境との関係、開発に要する漁獲努力量に影響を与える魚の回遊や習性等についての調査に貢献すると思われる。

マリシプロダクト社の技術部長 Johan Viljeon 氏は、20年間にわたる同氏の調査結果と信頼できる漁労長等からの報告などを取りまとめ、南アフリカ及びナミビア沿岸域のアンチョビーの回遊と群形成に関する報告書を作成した。

この報告書は、Viljeon 氏自身の長期間にわたる海上調査とワルビス湾、セントヘレナ湾及びウォーカー湾等、アフリカ西岸に広く点在し、浮魚類を水揚げ加工している多数の

工場に所属する漁船の漁労長からの資料の提供を受けていることから、信頼性は高いものと思われる。

Viljoen 氏は、調査には数々の有益な事項が含まれていることを強調している。あるパターンが現われると、これが数年間にわたり出現することがあると指摘している。

また、アンチョビーの回遊経路を図示する前に、まず、魚の習性について数多くのコメントを行なっている。

群形成の型は、アンチョビーとピルチャードでは基本的に異なる。ピルチャードは環境条件とは関係なく、本能的に群を形成する。アンチョビーは、かなり長期間にわたり分散しており、環境条件が群形成に影響を与えるようである。例えば、海水が褐色や緑色を呈しているか、清澄で燐光性の物質が含まれているか、いないかなど、水質が群形成に影響を与えるようである。このことから考察するに、アンチョビーの群形成は、餌の種類と量に影響を受けるようである。アンチョビーの群形成が不規則な場合は、フィッシュ・ミール製造の際に魚油の産出が低いのが通例である。また、成年魚は若年魚よりも分散しており、北風のときは動きが早く、群の解消も非常に速い。また、南部海岸域は西部海岸域に比べ、群形成は不規則である。

Viljoen 氏によると、アンチョビーはピルチャードに比べ、群れが散らばっていることが多く、一般に漁業者は小型の群を漁獲するのを好まず、結果として資源保護になっている。

アンチョビーの群形成には、自然環境が影響することは明らかであり、例えば、ワルビス湾の南部で環境が悪いときは魚が出現せず、良いときは通常魚が分散している水域にも群が形成されるのが観測された。

Viljoen 氏によれば、ウルメイワシの一種 (redeye round herring) の資源が大量にあるにもかかわらず、これに見合った漁獲ができないのは、ウルメイワシはアンチョビー

よりさらに散らばりが広く、漁獲が難かしいためであり、結果として資源保護になっている。また、ウルメイワシは、日中は水面下のかなり深い、旋網の届かないところで群れを形成し、夜間に水面に浮上するが、群団形成はごく希れであり、しかも漁船などの動きがあると直ちに分散し、旋網の操作に最も難かしい風下へと逃げ、自然に漁獲から免れ、資源保護となっている。この事実から、ウルメイワシには漁獲割当量の規制がないので、大量の水揚げが期待されてはいるが、恐らく困難であろうと思われる。

Viljoen 氏は、アンチョビーの群形成は、その日の時間によっても異なり、非常に不規則なので、1 隻の調査船では回遊経路の調査などは不可能に近いと言っている。しかし、数隻の漁船がアンチョビーのみを対象に漁業を行なっている場合には、魚群の動きをある程度明らかにできると思われる。その例として、多数の漁船が広い漁場で操業中、アンチョビーの群を発見した場合、その場所を中心に各漁船が群の移動を観察し、その方向を知り、これに合わせて投網する。なお、附近で操業する他船との情報交換もできるので、多数の漁船隊が操業する場合は容易に魚群の回遊経路が確認でき、ある期間中群を追いながら操業が可能である。

アンチョビーの回遊は、ナミビアのクロス岬北部のものを除き、一般に南方向に向かい、アフリカ西岸では沿岸、沖合ともに北方向への回遊は見られない(図1 参照)。

回遊は1年中続き、夏期にはやや不活発になることが判り、アンチョビーの沿岸における回遊経路を図示することができるようになった。この結果、漁船がある海域で、ある期間操業すると、必ずアンチョビーの回遊群を発見でき、良い漁獲ができるようになった。もし、漁船が北部海域から回遊してくる新群団を発見できない場合は、先に遭遇した南方回遊群を追って操業を続ける。

アンチョビーは、通常1日に8～12マイル移動する。しかし、北西風が吹くと魚は速度を増し、大型アンチョビーが1日に60マイルも遊泳した記録がある。

アンチョビーの漁獲は、通常日中行なわれる。魚群が速い速度で移動する場合は、遅いものより一般に濃厚群が多い。アンチョビーが東方向へ回遊している場合は、夜間でも日中と同様良い漁獲があり、また、ある海域では夜間のみ漁獲されるところもある。

ワルビス湾とセントヘレナ湾では、回遊経路が偏向することがある。この場合は回遊速度が遅くなる。その典型的な例として、朝は東方に向かい、昼は北西に、日没前は南西に、日没後は南南東に向かう。しかし、1～2日の後には例外なく南方向へ回遊する。

漁獲対象となる群は、海洋条件がいかに群形成に適しているかにもよるが、通常回遊中の魚群を対象とする。アンチョビーの同一魚群でも、ランバート湾では良い漁獲をあげ、逆にサルダナ湾では漁獲が少ない。

Viljoen氏は、これら数多くの調査資料を基に、詳細なアンチョビーの回遊路を図示した。

また、科学的調査の結果、アンチョビーは10月から1・2月の間にアグラス・バンクで産卵することが判った。幼魚はベンゲラ海流とペニンスラー岬沖の夏期の南東風に乗って西海岸に運ばれる(図2参照)。ところが、昨年及び今年のように風力が例年になく弱く、しかも吹く回数も少ないと、幼魚の移送ができないのではないかと憂慮されている。

アンチョビーの若年魚が群を作り、南方向へ回遊を始める時期に、幼魚が西海岸のどの辺まで運ばれているのかはまだ明らかになっていない。大量の幼魚が、西海岸の従来の漁場をはるかに越えて運ばれてきているのが観測され、さらに一部の幼魚は、ベンゲラ海流がはるか沖合を流れているにもかかわらず、ワルビス湾を越えてナミビア海域まで運ばれているようである。

ワルビス湾漁船隊がアンチョビーの良い漁獲をあげた約2か月前に、小型アンチョビーがワルビス湾の西部海域に現われ、魚探に小型の引掻き傷のような陰影が見られたが、あまり小型魚のため12.5mmの網目から逃げてしまった。

漁獲対象となるアンチョビー群が、ワルビス湾及びヘンティーズ湾の北西部海域に出現する時期は、通常5月である。しかし、その前は魚群がどこにいるのか、どこを回遊しているかは不明である。残念ながら現在までのところ50マイル以遠の海域の調査は皆無である。

魚群が沖合から南方向に回遊を始め、ワルビス湾に到達すると泳ぎが緩やかになり、方向を変えたり、動きが鈍くなったり、ときには同じ所をぐるぐる回っている。そして、1日2マイル程度のゆっくりした速度で南方向に回遊する。

魚群がサンドイッチ港に到達すると泳ぎも速くなり、魚群も濃厚群となり、南方向に回遊を続け、回遊速度も1日当たり10～15マイルと速くなる。丁度、鳥類が渡りを始めるときの状態を想起させ、この時期に夜間に良い漁獲が始まる。

魚群は南方向に回遊し、漁船隊もこれに従って移動する。漁船がワルビス湾から南方に移動する際、湾外で南方向に移動しているアンチョビーの群団によく遭遇する。この魚群は栈橋近くまで接近し、容易に漁獲されている。このようにワルビス湾の漁船隊は湾近くで容易に漁獲ができるので、コンセプション湾を越えて遠くまで魚を追いかけるのは少なく、かくして、南方向へ向かう魚群は支障なく回遊を続ける。もし、ワルビス湾に新らたに魚群の出現がない場合は、ワルビス湾の漁船隊は初めに発見した魚群を追って南方に向かう。

過去の例によると、魚群は南方のオレンジ川に向けて回遊し、ホラムズバード島とマールキューリー島との間、イチャボ島とボセション

島の間及びオレンジ川の北部のブラックポイントとシャモール湾との間で分散するのが通例である。海況条件が良ければ、これらの海域で良い漁獲がある。なお、魚群がホルムスバード島からオレンジ川への280マイルの距離を3週間で回遊している。

オレンジ川沿岸域に來遊した魚群は、しばらく滞泳する。しかし、漁労長の報告によれば何らかの刺激を与えると、魚群は除々に南方に移動するのが見られた。この群れを追ってナミビアの漁船が非合法であるにもかかわらずノロス港まで移動する。ノロス港からは、魚群は速度を速め、急速に南方へ移動するようである。なお、ランバーツ湾とケープポイントの間の西岸海域で操業している餌取り漁船やロブスター漁船の報告によれば、アンチョビーの群は11月までにはこの海域を通過する。

なお、オレンジ川海域では魚群形成に至らない若年魚が多く、北方向に流されていく幼魚群の大部分が、この海域の外側に滞泳しているものと信じられている。そして、この海域の若年魚の群形成初期の習性は、ワルビス湾沖の若年魚の群形成時と同様である。

アンチョビーの若年魚は、川から流れ出る黄色の水域を好むようで、この水域では魚は集合する傾向がある。また、ルーデリッツ沿岸に近付くのが観測された。

魚は群形成後、ノロス港に向かって徐々に移動するようである。ロブスター漁船がノロス港海域で初秋にアンチョビーの群を発見し、その後1か月以内にオリファント川海域でアンチョビーの漁獲をあげている。魚群は、さらに南方へ回遊を続け、4～5日後にセントヘレナ湾に到達する。

漁船が操業を始めると、魚群は分散し、速度を速めて南方へ回遊する。

魚群は、回遊の途中で投縄などで脅されると、急きょコロラン岬を回り、セントヘレナ湾の西方へと曲がる。このような方向変換のため回遊速度は遅くなる。このような動き

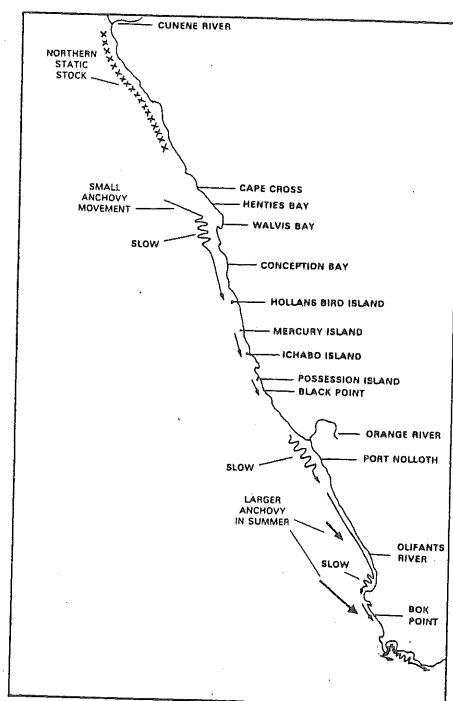


図1.

南部アフリカ西海岸における若年アンチョビーの回遊経路

→ 北西部海域からの大型アンチョビー群団がケープタウン沖合で回遊群に加入する。

× ナミビア北部海岸沖に停滞しているアンチョビー資源

が起ると、その後、約3日間はパタノスター・ポイントの真北のブリタニア・ブラインダーから魚群が姿を消すのが通例である。これは、魚が分散し、群れが極端に薄くなったか、魚群がサルダナ湾沿岸の断崖に沿って移動しているためと考えられている。

サルダナ湾を根拠にしている漁船が、セントヘレナ湾沖で操業して徐々に南下し、母港のサルダナ湾に帰り、もし、北から加入する新規魚群団を発見できない場合は、サルダナ湾及びセントヘレナ湾を根拠にしている漁船の両者とも南方方向に移動するが、この移動中の2～3日の間に、サルダナ湾沖で大群団の形成に遭遇することが多い。

この魚群の移動は非常に速く、また、3～4日後には、ロッベン島北部のボック・ポイント沖で分散するのが通例で、その前の短い期間に漁獲せねばならない。

漁場環境が群形成に好ましい場合は、アンチョビーの若年魚はポイント岬を回って沿岸に沿って南下する。この間約3日間である。

大型アンチョビーは、夏期にベンゲラ海流の沖側の沿岸から遠い海域で漁獲され、魚群は、より深い海域へ移動する傾向を持っており、セントヘレナ湾水域に入る機会を逸するようである。一般に、大型アンチョビー群は、通常のアンチョビー漁場のはるか沖合に発見される。大型アンチョビーは、北西部の深い海域より来遊し、ペニンスラー岬へ向け速い速度で移動する。ついでポイント岬を回り、速度を落し、大きな群を形成するときには大漁がある。

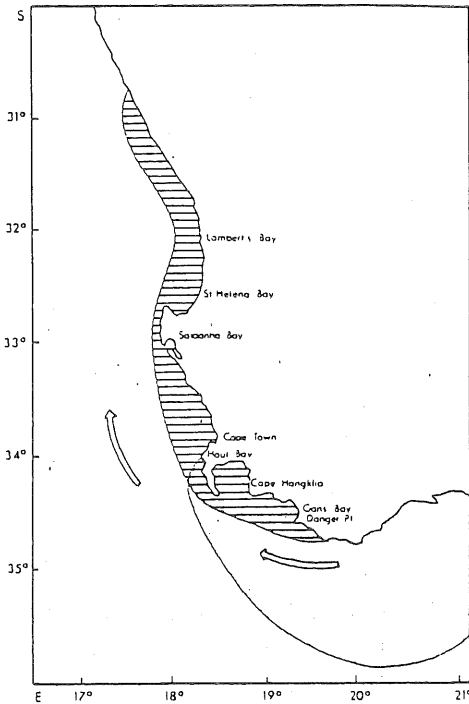


図2.

- アンチョビーの産卵海域
- ▨ アンチョビーの主要漁場
- ← 海流

夏期に大型アンチョビー、冬期に小型アンチョビーがフォールズ湾に入り、南東風に乗ってゆっくり移動する。しかし、群は天候によって1週間、ときにはそれ以上の期間フォールズ湾に滞泳している。もし、北西風が吹くと2日以内にフォールズ湾から逃げ出し、また、湾に入ろうとしている魚群も通過してしまう。

ウォーカー湾水域では、アンチョビーは思い思いの方向に泳ぎ回りながら除々にデンジャー・ポイントに向かって移動し、これを通過すると急に速度をあげて移動し、クワイン・ポイントを通過する。この海域は、浅くて岩礁が多く、旋網の操業は困難で、魚群は漁労操業などに脅かされることもなく、東方のアグラス岬方向へと回遊を続ける。

この海域では、アンチョビー漁業が始まって以来、アンチョビーの回遊経路が変わったことがないという重要な事実が報告されている。

アグラス岬の東部海域で操業する沿岸トロール漁船や同岬の南部海域で操業するロブスター漁船の漁労長達によると、グレート・フィッシュ川までの南アフリカ南部沿岸水域には、大量のアンチョビー及びビルチャードが棲息していると報告している。この海域ではアンチョビーやビルチャードがイカ釣り漁船の集魚灯に集まるのが観察されている。特に、この海域は清澄で、潮流も速く、天候も変り易く、旋網操業に不向きで、集魚灯の応用を考慮すべきであろう。

上述したアンチョビーの回遊経路調査から判断すると、南部アフリカの西海岸海域のアンチョビーの回遊経路は単一な型であろうと考えられる。即ち、

- 産卵ふ化するアグラス・バンクからの幼魚は、ベンゲラ海流に乗って、南アフリカ西岸の北部漁場に移動する。そして、幼魚はベンゲラ海流のはるか沖合を通過しているワルビス湾にも出現する。
- アンチョビーは一生に一度、北部漁場から

南部沿岸海域に回遊する。

一方で、大型アンチョビーの資源がナミビアのクロス岬の北部海域で見られたこともあったが、これは明らかに南部海域の資源とは別のものと考えられる。もし、この資源がアグラス・バンクでふ化した幼魚と混合したり、アンゴラ水域に運び込まれて混合したものとすれば、この事実を説明することは大変興味深いことである。

南アフリカのアンチョビーとナミビアのアンチョビーの遺伝学的研究が行なわれたが、この両海域のアンチョビーには相互に関連がなく、両者の関係は明らかでない。今後、多くの標本を集め解析を行なう必要があろう。

Viljoen 氏は、ワルビス湾からアグラス岬に回遊するアンチョビー群を漁獲する際に、速度の速い群の場合には、群の一部をかすめ獲る程度の比較的少量の漁獲を行なっているに過ぎないと信じている。

例えばランバーツ湾の北部海域とサルダナ湾の南部海域では群があまり分散しないので、ランバーツ湾からサルダナ湾への回遊途中でかなり多く漁獲されているが、サルダナ湾の群がランバーツ湾の群より小さいという徴候は見られなかった。これと同様なことがワルビス湾でも観測された。

前記の事実と、餌取り漁船やロブスター漁船等からの報告から判断して、浮魚類の全漁獲割当量が充足された11月までの間に、西海岸を南下中のアンチョビー群の10%以下の漁獲をしているに過ぎないと一般に考えられている。そして、資源の大部分はアグラスを通過し、産卵群に加わるものと信じられている。

前記のことが正しいとすれば、アンチョビーの資源は増大し、その事実は数年後に明らかになるであろう。

1958年に、西海岸でアンチョビーがピルチャードの網に目掛けするのを初めて経験し、その後1962年までこのことは漁業者にとって

大変厄介な問題であった。そして、1962年にアンチョビー専用の小型網目(12.5mm)の漁網を使用するに至り、1964年に良い漁獲をあげ、1966年には南アフリカの全漁船がこの網を使用するようになった。

ナミビア海域では、1968年まで28mmの網目のピルチャード網を使いアンチョビーを漁獲し、目掛けで苦労していたが、同年12.5mm網目のアンチョビー網に切替えた。この海域では、アンチョビー資源は1972年まで増加し続け1973年には最高となり、前年の2倍の漁獲をあげ、かつてない大漁となった。

前記のようなアンチョビーの大漁にもかかわらず、魚群のかなりの部分が漁獲困難な深い所に滞泳しており、資源量の全貌を知ることができなかったものと考えられている。

1974年に南部海岸水域で従来より早い時期に、アンチョビーの大群を発見し、その後、1974年から1982年の9年間の1月から4月までのアンチョビー漁期の漁獲量は、1974年以前8年間の平均漁獲量の7倍という大漁が続いた。この結果、1974年以降は漁期開始後3~4カ月で漁獲割当量を充足している。

チリーの水産事情

(出典: Advertisement of PROCHILE, 1983年2月号)

1. 概況

チリーの海岸線は4,500kmあり、沖合海域には魚類、甲殻類、貝類及び藻類が豊富に棲息し、水産資源の開発が期待されている。

チリーの水産業は、同国経済発展に大きな役割を担い、国民総生産に占める割合は過去10年間は平均1.5%から2%であった。

漁業の主体は、距岸40マイル水域内の浮魚と底魚を対象とする沿岸漁業で、これより以遠の200海里漁業規制水域内の沖合漁業資源は未開発であり、漁業開発への投資が期待さ

れている。

チリーは気象条件、地理的条件に恵まれており、さらに漁場が港湾に近く、1年中水産物の収獲が可能である。

1981年の総漁獲量は340万tに達し、ラテンアメリカでは最大の水産国となり、ペルーと共に世界の重要な水産国となっている(図1、表1参照)。

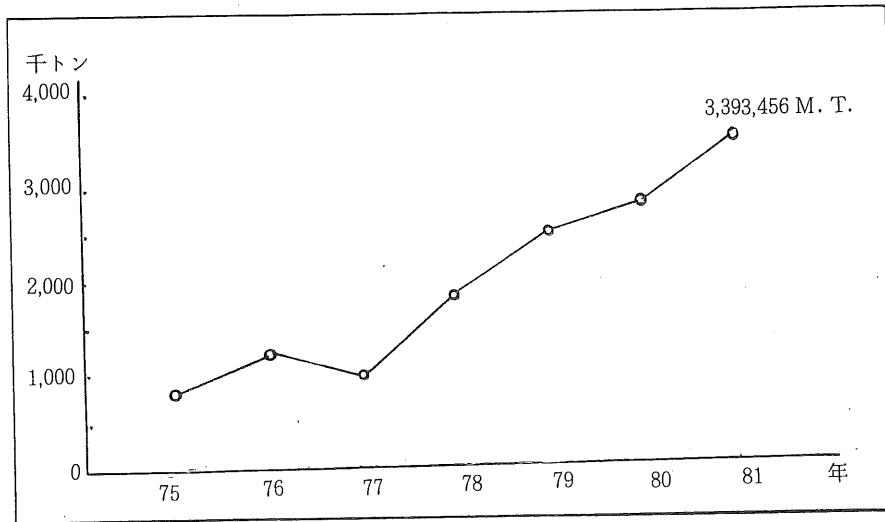


図1 1975～1981年の総漁獲量の年次別推移

表1. 1981年の総漁獲物の利用配分

製 品	仕 向 け 量 (t)	%
冷 凍	135,135	3.98
缶 詰	102,763	3.02
フィッシュミール	2,956,071	87.11
その他加工品	3,160	0.08
生 鮮 消 費	196,327	5.78
総 計	3,393,456	
工船漁業による漁獲量 80,847 tを含む。		

備考: 漁獲物の87%がフィッシュミール原料となり、残りは生鮮、冷凍及び缶詰原料に向けられた。

2. 加工水産物生産量

1981年の水産加工品の総生産量は860,547 tで、前年より9.65%も増加した。とくにフィッシュミールは前年より20.37%と大巾に増加した(表2参照)。

3. 魚種別漁獲量

1981年の魚種の総漁獲量は、工船による漁獲量を含めると約330万tとなり、その主な

魚種は、スパニッシュサーディン、アジ、アシチョビー、バシフィックマッケレル、ヘイクである(表3、図2参照)。

4. 甲殻類・貝類の漁獲量

1981年の甲殻類、貝類及び棘皮動物類の総漁獲量は102,800 tで、年によって幅があり、平均すると116,000 t前後で、主な種類は2枚貝、アワビ、ウニである(表4、図3参照)。

表 2. 1980～1981年加工水産物生産量

(単位・t)

	1980	1981
冷凍品	13,571	15,374
塩干品	129	11
燻製品	112	34
その他の加工品	38,012	29,540
フィッシュミール	517,857	688,318
魚油	111,000	127,270

表 3. 1981年の主な魚種別漁獲量

地 方 名	学 名	漁 獲 量 (t)
スパニッシュサーデイン	<u>Sardinops sagax musica</u>	1,585,294
ア ジ	<u>Trachurus murphyi</u>	1,035,950
アンチョビー	<u>Engraulis ringens</u>	278,793
パシフィックマッケレル	<u>Pneumatophorus Peruanus</u>	94,922
スパニッシュヘイク	<u>Merluccius polylepis</u>	36,731

フィッシュミール原料は主として、イワシ、アンチョビー、パシフィックマッケレルである。

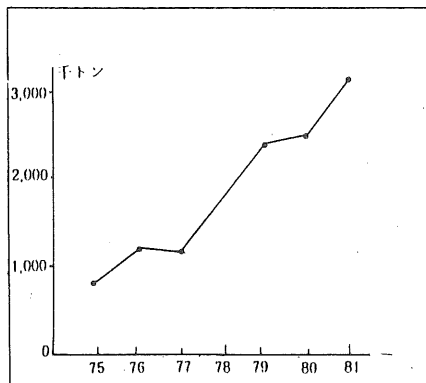


図 2. 1975～1981年の漁獲量推移

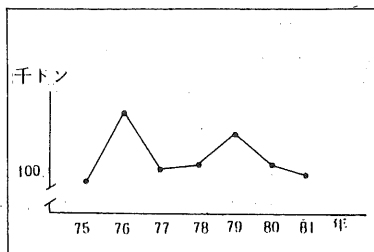


図 3. 1975～1981年の甲殻類・貝類等の漁獲量の推移

表 4. 1981年の甲殻類・貝類等の漁獲量

地方名	学 名	漁獲量(t)
ハマグリ類	<u>Ameghinomya antiqua</u>	29,429
アワビ類	<u>Concholepas concholepas</u>	16,951
ウニ類	<u>Loxechinus albus</u>	15,049
イガイ類	<u>Mytilus chilensis</u>	8,841
マッセル	<u>Aulacomya ater</u>	7,457

5. 藻類生産量

藻類の採捕は、沿岸の漁民によって行なわれ、1981年の総生産量は生重量で109,631tであった(表5参照)。

種類は表5のとおりで、重要品種はオゴノリ、レソニア類である。

6. 地帯別漁業概況

チリーの全沿岸には12州が設定されており、州を地理的条件及び漁業状況によって、北部、ノルト・チコ、中部、南部、最南部の5地帯に分け、地帯別漁業概況を下

記に述べる。

a) 北部地帯

州Ⅰ、ⅡとⅢのⅠ部を含む。

重要な漁業中心地はイクィクェ、メヒリオネス、アントファガスタである。

この地帯は、チリーの漁業の中心地帯で、主な魚種はイワシ、アジ、サバ、アンチョビー、貝類（カタツムリ、アワビ）及び藻類である。

漁法は囲い網である。

漁獲物は主として加工され、塩干品、フィッシュミール、魚油等が生産されている。

1981年の総漁獲量は2,433,431tであった（表6参照）。

b) ノルト・チコ地帯

州ⅢとⅣを含む

主要漁港はカルデラ、コキンボで、主な魚

類はアジ、イワシで、貝類はアワビ、ハマグリ、藻類はレソニア、オゴノリ、ギンナンソウであった。

1981年の総水揚量は160,140tであった（表7参照）。漁法は囲い網が主である。

漁獲物のうち、魚類、貝類は缶詰及び冷凍にされ、藻類は乾燥される。

c) 中部地帯

州ⅤからⅧまでを含む

主な漁業中心地は、キンテロ、バルパライソ、サン・アントニオ、タルカワノである。

漁獲される魚類と甲殻類はイワシ、アジ、ヘイク、イエローシュリンプ、エビ、ハマグリ、イガイ、カタツムリ、カニ等で、藻類はオゴノリ、ギンナンソウである。

1981年の総漁獲量は719,409tであった（表8参照）。

表5. 1981年の藻類の生産量

地 方 名	学 名	生産量* (t)
南極コンブ	<i>Durvillea Antarctica</i>	113
テングサ	<i>Gelidium</i> sp.	915
スギノリ類	<i>Gigartina chamissoi</i>	6
ツノマタ	<i>Chondrus canaliculatus</i>	138
ギンナンソウ	<i>Iridaea laminariodes</i>	14,630
レソニア	<i>Lessonia nigrescens</i>	59,355
マクロシステイス（コンブ目）	<i>Macrocystis integrifolia</i>	1,510
オゴノリ	<i>Gracilaria confervoides</i>	32,964
* 生重量（水分80%）		

表6. 1981年の北部地帯（州ⅠとⅡ）の総漁獲量と利用配分

（単位：千t）

種 類 名	漁獲量 (千t)	生 鮮	冷 凍	缶 詰	フィッシュ ミール
スパニッシュサーディン	1,490.9	36.2	—	24.6	1,430.1
ア ジ	474.8	6.2	—	4.1	464.5
アンチョビー	317.0	16.7	—	—	300.3
パシフィックマッケレル	95.6	0.8	—	3.9	90.9
カタツムリ	2.9	0.2	2.7	—	—
ア ワ ビ	4.0	1.4	2.6	—	—
レソニア	6.7	—	—	—	—

表7. 1981年のノルト・チコ地帯(州ⅢとⅣ)の総漁獲量と利用配分

(単位:千t)

種 類 名	漁 獲 量	生 鮮	冷 凍	缶 詰	フィッシュミール
スパニッシュサーディン	65.4	0.9	-	20.6	43.9
ア ジ	49.8	1.4	-	10.7	37.7
ア ワ ビ	5.7	2.1	2.4	1.2	-
ハ マ グ リ	2.7	2.7	0	0	-
レ ソ ニ ア	18.2	-	-	-	-
オ ゴ ノ リ	4.5	-	-	-	-
ギンナンソウ	3.9	-	-	-	-

表8. 1981年の中部地帯(州ⅤからⅧ)における漁獲量と利用配分

(単位:千t)

種 類 名	漁 獲 量	生 鮮	冷 凍	缶 詰	フィッシュミール
ア ジ	532.2	39.7	7.1	13.7	471.7
スパニッシュサーディン	71.4	2.3	-	4.1	65.0
コモンサーディン	35.9	1.3	-	0.2	34.4
ヘ イ ク	27.8	23.2	4.5	0.1	-
アンチョビー	5.5	0.4	-	0.2	4.9
イエローシュリンプ	9.0	5.3	7.6	0.1	-
ミノエビ	2.9	0.1	2.7	0.1	-
マ ッ セ ル	5.4	1.4	-	-	-
ア ワ ビ	2.2	0.8	0.8	0.5	-
オ ゴ ノ リ	8.2	-	-	-	-
ギンナンソウ	8.6	-	-	-	-

表9. 1981年の南部地帯(州Ⅹ, Ⅺ)における漁獲量と利用配分

(単位:千t)

種 類 名	漁 獲 量	生 鮮	冷 凍	缶 詰	フィッシュミール
ヘ イ ク	4.5	1.3	3.0	-	0.2
スパニッシュヘイク	1.6	0.1	1.5	-	-
ア ナ ゴ	1.3	0.6	0.6	-	-
ア ジ	1.2	0.9	-	-	0.1
ハ マ グ リ	24.6	17.9	0.8	5.9	-
イガイの一種	7.4	3.0	0.7	3.7	-
マ ッ セ ル	6.0	1.6	0.1	4.3	-
ア ワ ビ	5.0	1.6	1.3	2.4	-
カ キ	0.5	0.5	-	-	-
ウ ニ	14.7	4.5	7.2	0.4	2.6
オ ゴ ノ リ	18.3	-	-	-	-
ギンナンソウ	2.1	-	-	-	-
工 船	80.8	-	-	-	-

表10 1981年の最南地帯(州Ⅻ)の漁獲量とその利用配分 (単位:千t)

種 類 名	漁 獲 量	生 鮮	冷 凍	缶 詰
タ ラ バ ガ ニ	1.3	0.1	0.8	0.4
ズ ワ イ ガ ニ	0.3	-	0.2	0.1

d) 南部地帯

州XとXIを含む

主な漁港は本土側のバルディビア、ペールモント、チロエ島のカルブコ、アングド、クエジョン、チョンチの4カ所及びアイセン島のメリンカである。

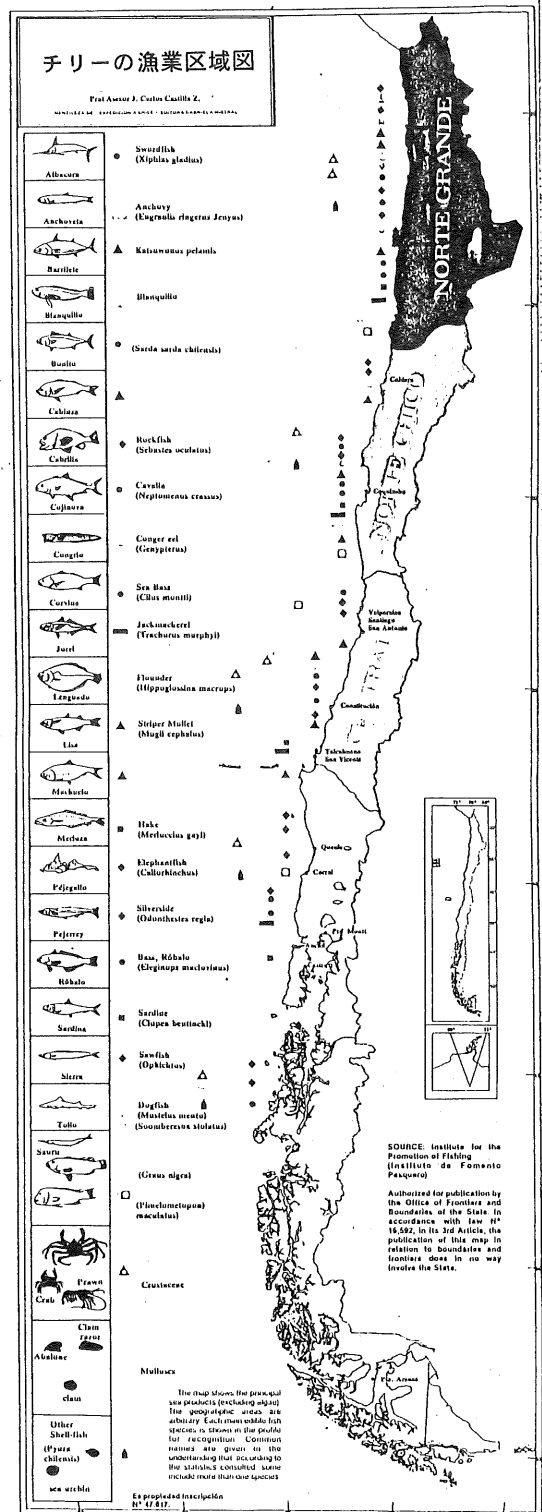
この地帯は明らかに2つの異なる海域に分かれ、第1は海峡水域で、主な漁獲物は沿岸性魚貝類の、ハマグリ、イガイの一種、マッセル、ウニ、アワビ等で、藻類ではオゴノリ、ギンナンソウである。第2は公海における工船式漁業で、底魚類を漁獲し、1981年には80,841tを水揚げしている(表9参照)。

漁法は囲い網で、貝類は貝けた網を使用している。

e) 最南地帯

州XIIを含む。

主な漁業根拠地はプンタ・アレナス、ボルベニール、ペールト・ナタレスで、主な漁獲物はタラバガニとズワイガニで、1981年に2.39tを漁獲し、缶詰及び冷凍に向けられた(表10参照)。



アロツナスは価値ある 漁業対象になろう

(出典: Catch, 1983年5月号)

最近、日本では海洋水産資源開発センター(JAMARC)がニュージーランドの漁業規制水域外のアンティポード諸島の南東海域及びノーフォーク島の北東海域で、アロツナスの開発調査を行ない、その成果に対し、アロツナスがカツオに代る貴重な新魚種として業界から大きな興味が寄せられている。

従来、アロツナスは脂肪分が多いことで未開発のまゝであったが、缶詰や切身として市場開拓が可能であろうと期待されている。

日本の水産経済新聞の報道によると、JAMARCがニュージーランドの沖合海域で企業化調査を行ない、かなり大量のアロツナス資源を見出した。この調査には、第12宝洋丸299,16tが調査船として使用され、ノーフォーク島北東海域で、1982年10月25日から11月末までの間に28回にわたる流し網操業を行ない、73tを漁獲した。さらに、同船はアンティポード諸島南東海域で、1983年2月9日から2日間の操業で27tを漁獲した。この魚体の大きさは10月、11月に獲れた6~7キロの大きさに比べ、やや小型であった。これは前者は産卵期のものであり、特に、後者は海水温10°Cという低温水域で漁獲されたための相異であろうと乗組員達が推測している。

JAMARCによれば、従来、アロツナスについては生理学的事項、環境条件、分布等について殆ど知られていなかった。今回の調査で98.8tの漁獲をあげ、この結果からみてニュージーランド海域は非常に高い生産力を持っていることが判ったと述べている。

日本の静岡県水産加工業者協会会長村松氏は、この魚種の発見という大きなニュースは大分前に耳にしていたと言っている。

ニュージーランド農漁業省の科学者デーブ・ギブソン氏は、アロツナスは過去において市場性が全くないにもかかわらず、ニュージーランドやオーストラリアの漁業者が、この豊富な資源を開発し、大いに利益をあげようと努力したが、常に失敗していた。特に、この魚種は脂肪分が多く一般向きとならなかった。また、昨年はニュージーランドの2人の漁業者が、アロツナスの漁獲用に特別な漁法を考案し、漁獲を行なったが、その販路が見出せなかったと言っている。

しかし、日本でアロツナスの市場開拓ができれば事態が変わり、ニュージーランドにとっても有利になるであろう。

アロツナスの市場開拓には、1950年代にミナミマグロの市場開拓に際し、市場測定や膨大な宣伝活動を行なったのと同じことが必要となろう。

カツオは200海里漁業規制水域で漁獲される場合が多いが、アロツナスは200海里規制水域から遙か遠い海域に生存していることが大きな有利点である。

ギブソン氏は、アロツナスに関する情報は極めて少ないが、その結果から見てもニュージーランド近海の資源量は膨大なものであることは確実であると明言している。

ところで、チャルマーズ港のグローブ水産物輸出会社が、1昨年日本へアロツナスの輸出を試み失敗しており、以来同社はこの仕事に全く興味を失ったと同社のマネージャーのアラン・クレイマ氏が話していた。

しかし、同氏は今年日本訪問を予定しており、日本の多くの加工業者に会って、事態がどのように変化したかを調査することになっている。

アロツナスの大きな問題点は、肉の色が一樣でない点で、個体ごとに灰色から明るい赤色と様々である。一方、肉色はともかくとして、脂肪分があまりにも多く、缶詰に向かないのではないかと心配される点である。

クレイマ氏は、アロツナスを漁獲する価値

があるとするためには、魚価が少なくともトン当たり1,000ドルにならないと漁業者にも加工業者にも経済的に引き合わないであろうと指摘している。また、同氏は、多くの漁業者がいろいろな魚を漁獲し、いろいろな加工品を市場に供給しているが、需要に見合った供給をせず、ときには経済法則を無視して大量に漁獲し、値崩れを起してきたことを忘れる傾向があると指摘している。

JAMARCは、アロツナスの試食会を開いたり、見本を加工業者などに配布し、普及に努力し商業ベースに乗るかどうかについて調査活動を行なっている。水産経済新聞の報道によれば、製品見本の展示や試食会を開いたりして、結果が良ければアロツナスはカツオとの競合品になるであろうと記している。

世界のマグロ漁業の現状

(出典: Tuna Newsletter: SWFC
NMFS, 1983年秋季号)

アメリカ海洋漁業局、国際漁業部海外漁業分析課は、世界のマグロ漁業についてとりまとめ報告した。

1. ブラジルのマグロ漁業

① マグロ漁業計画

ブラジル政府の漁業開発庁 (Superintendency de Desinvolviment. Pesquero (SUDEPE)) は現在、輸入に頼っているマグロ缶詰を国内生産で賄い、さらに外国へ輸出し、外貨の獲得を計るべく、マグロ漁業開発計画を進めている。それによると、現在、イワシ旋網漁船を使ってマグロを漁獲しているが、このような非効率な漁船を燃料消費効率の高い最新式のマグロ旋網漁船に転換するために緻密なマグロ漁業開発プロジェクトを計画している。

② 政府のマグロ漁業に対する助成

ブラジルのマグロ漁業開発プロジェクトは

9月から開始され、これには、SUDEPE、業界、国立信託協同銀行 (Banco Nacional de Credito Cooperativo (BNCC)) が協力している。

また、政府は漁業者に性能の良い機関やソーナー、冷凍施設等を取り付けた漁船建造のための購入資金を融資し、BNCCはマグロ漁船の国内建造は勿論、外国の造船所での建造にも融資を行なっている。

なお、SUDEPEでは新型漁船の設計や性能試験を行なっており、ディーゼルエンジン漁船に帆を装備させて、燃料効率を高める試験も行なっている。

③ マグロ漁業の生い立ち

1975年のアンゴラの内乱からブラジルに逃れて来たアンゴラ人のマグロ漁業経験者ジョルジェ・フォンセカ氏 (Jorge Fonseca) は、ブラジルのマグロ漁業界の先覚者で、1975年当時はブラジルの漁業者は、マグロ漁業に関心が無かったが、同氏が漁業者にマグロ漁労技術を教えて以来、ブラジルのマグロ漁業は急速に発展し、ついにラテンアメリカの主要なマグロ漁業国となった。フォンセカ氏自身もブラジルの最大手のマグロ漁業会社 BRASTUNA社を経営しており、1981年は170万ドルに当るマグロ製品を輸出している

④ マグロ漁船

ブラジルでは、法律により漁船の輸入が禁止されていたため、同国のマグロ漁業の発展は大きく妨げられていた。ブラジルにはマグロ漁船の建造能力はあるが、ブラジルの造船所で建造すると1隻当たり200万ドルもかかり、建造期間は2年を要してしまう。しかし、日本の造船所に発注すれば、同型の船が50万ドルででき、建造期間もうんと短かいと言われていた。

⑤ マグロ漁業の現状

ブラジルのマグロ漁業は急速に発展を遂げ、1981年には約20,000t (未確認) を漁獲し、1980年に比べると75%も増加した。漁獲物の3/4

はアメリカ、アルゼンチンに輸出され、残りの1/3は国内消費に向けられ、生鮮または缶詰原料となっている。

2. チリーのマグロ旋網漁船

チリーでは、チリーと南アフリカの漁業技術者達が、新型の効率の高い旋網漁船の建造を主張し、現在、チリーのバルディビアのASENAV造船所で建造が進められている。この旋網漁船は、双発エンジンを備え、ショットル製2軸プロペラ (Schottel rudder/Propellers) を使用しており、サイドスラストなしで船の操縦が容易にできる新型漁船である。

3. コロンビアのマグロ漁業会社と韓国との合併事業

コロンビアの2つの漁業会社が、韓国とマグロ漁業の合併事業を希望し、相手企業を捜している。また、ヴィキンゴス漁業会社 (Vikingos) は15隻の乗組員を含んだ韓国漁船の用船を計画しており、他にも同様な計画を持っている会社が数社ある。一部の会社は、カリブ海と太平洋の両海域のマグロ及びイカ、その他魚類の漁業開発を目的に韓国漁船の用船と乗組員の雇入れ計画を進めている。さらにコロンビアの漁業会社は、韓国の漁業技術者や水産物加工技術者を技術指導のために受け入れる計画を進めている。

4. コスタリカの漁業開発プロジェクト

コスタリカ政府は、太平洋岸のゴルフイト (Golfito) に漁業コンビナートの建設を計画しており、漁船上架装置、収容能力7,000 tの冷蔵庫、缶詰工場、加工工場等の建設を予定している。政府は、この冷蔵庫を利用し、マグロ類をヨーロッパに輸出する計画を進めている。

5. パナマのマグロ漁業

パナマにはマグロ旋網漁船は6隻あり、うち4隻はアメリカ資本との提携会社ペスケラ・グラナダ社 (Pesquera Granada) に属している。この国では、パナマを根拠にして

操業したり、パナマ運河を通行する外国のマグロ旋網漁船へのサービス業が重要な産業の1つとなっている。特にパナマ運河を通行するマグロ漁船や漁獲物運搬船のパイロット業は、パナマの船長には魅力のある仕事である。パナマ政府はマグロ漁船関係へのサービス業だけで14,000万ドルの収益をあげていると推定している。

6. キューバのマグロ漁業

キューバは、マグロ漁業の拡充を計画し、遠洋マグロ旋網漁船を外国へ発注してきたが、1980年と1981年の両年は外貨不足で中止せざるを得なかった。そこで、目下エビトロール漁船の過剰になったものをマグロ漁船に改造し、沿岸マグロ漁業に使用するべく進めており、当局は沿岸でのマグロ漁獲量が急速に増加するものと期待している。

7. エクアドルのマグロ漁業

① マグロ製品の輸出

1980年にエクアドルがアメリカのマグロ旋網漁船を掌捕して以来、アメリカはエクアドルからのマグロ製品の輸入を禁止している。このため、エクアドルのマグロ製品の輸出は極端に減少し、1981年の冷凍マグロ輸出は6,400 tに減り、1979年の22,600 tに比べて70%も減少した。従来、エクアドルの冷凍マグロはアメリカへ輸出していたが、現在のところ他に市場開拓も見込めず、缶詰原料向けざるを得なく、このためマグロ缶詰輸出が増えて、1979年の2,900 tから1981年には4,000 tと大巾に増加した。

② マグロ漁業の近況

エクアドルのマグロの漁獲量は上昇しており、1981年には8,300 tであったが、1982年は13,700 tに達した。増加の主な要因は、カツオの漁獲の急増によるもので、キハダはやゝ減少した。特に11月のカツオ漁況が良かった。

エクアドルのマグロ漁船の勢力は、東部太平洋海域においては、アメリカ、メキシコ、

ベネズエラに次いで第4位となった。

8. 東部太平洋海域におけるマグロ漁業の現状

東部太平洋の1982年1月から9月におけるマグロ類総漁獲量は170,000t(うち、キハダ93,400t, カツオ77,500t)で、1981年同期の総漁獲量216,800tに比べ21%減少した。1982年の年間総漁獲量は、漁獲努力量の減少もあって230,000t程度(うち、キハダ13万t, カツオ10万t)と推定され、1981年の271,300tに比べ15%程度の減少と思われる。

9. 東部太平洋海域におけるマグロ漁船の現状

東部太平洋海域でマグロ漁業に参加している国は、1982年10月末現在では12カ国で、1981年同期に比べ4カ国減少した。また、コロンビア、オランダ、アンティル諸島、ペルーの漁業者は、この海域でマグロ漁業を中止したり、操業はしても漁獲が無かったりした。また、マグロ漁船の積載トン数も、1982年には前年より17,000t減少し、170,000tとなった。また、一部のアメリカのマグロ漁船は、西部太平洋海域へ出漁するため東部太平洋での操業を中止した。一方、東部太平洋で漁船を増やした国はソ連とベネズエラのみであった。

10. セーシェルとフランスとのマグロ合併事業

セーシールの200海里漁業規制水域設定に伴い、規制水域内におけるマグロ漁業の開発と漁業者に対する技術指導の目的で、フランスとセーシェルとの間で合併漁業会社の設立協定が締結された。

この協定により、フランスは200海里規制水域内で4隻のマグロ漁船の操業ができるようになり、うち2隻には魚群探索用ヘリコプターが搭載されている。なお、フランス市場開発援助指導基金(French Market Support and Guidance Fund)は、この合併事業に対し最初の1年間は、100万ドルを限度に、いかなる損失も補償することにして

いる。

フランスのマグロ漁業者は、アフリカ西岸沖合のマグロ釣獲率の低下や沿岸国の漁業規制の強化によって、マグロ漁獲量が減少している折、この協定の成立によって新漁場が確保できたことを歓迎している。

11. メキシコの漁業現状

① 漁業省の最高スタッフ

メキシコの新大統領ミゲル・デラ・マドリド氏(Miguel de la Madrid)は漁業大臣にペドロ・オヘダ・デ・パウジャダ氏(Pedro Ojeda de Paullada)を起用した。同氏は漁業の経験はないが、49才の若手で、政府与党の立憲革命党(Partido Revolucionaria Institucional (PRI))内閣で、2回にわたり閣僚を務めた経験豊かな政治家である。特に同氏は国際交渉に豊かな経験を持ち、行政手腕にたけ、またPRI内の理論家として高く評価されている。また、副大臣2人のうち、漁業交渉担当にフェルナンド・カストロ・イ・カストロ大使(Ambassador Fernando Castro y Castro)が任命され、他に前シナロア州知事のアルフォンソ・カルデロン氏(Alfonso Calderon)が起用されることになっている。

国立漁業港湾銀行(Banco Nacional de Pesqueros y Portuario)総裁にビクトル・マヌアル・ナバレテ氏(Victor Manuel Navarrete)が、国立漁業研究所長(Instituto Nacional de Pesca)にジョルジェ・カランサ・フレーザー博士(Dr. Jorge Caranza Fraser)が任命された。

② マグロ漁獲量の急減

1982年9月末現在で、キハダとカツオの合計漁獲量は30,800tで、1981年同期の58,500tに比べ50%の大巾減であった。しかしながら政府関係者は、多数の新造マグロ旋網漁船が近く稼動するので、1982年のマグロの総漁獲量は急増するものと期待している。一方で、多くのマグロ漁業者は経営資金が不足してい

ることや漁獲物の販売に未経験なことなど困難な問題をかゝえており、多くの漁船が港に係船されているのが現状である。

③ マグロ輸送に関する問題

プロダクト・ペスケロス・メヒカノス (Productos Pesqueros Mexicanos (PPM)) 漁業公社は、マサトランにおける冷蔵庫等の施設は、1日当りマグロ30tの収容能力よりないことから、同社所有のマグロ旋網漁船4隻を使用し、漁獲物をパナマに水揚げすることを計画している。

④ マグロ製品のカナダへの輸出

政府系のインダストリアス・ペスケラス・パラエスタタレス・デル・ノロエステ社 (Industrias Pesqueras Paraestatales del Noroeste (IPPN)) は、マグロ缶詰30万ケースをカナダへ輸出する計画をしており、現在10万ケースが販売されたが、残りの20万ケースは未だに売れ残りとなっている。問題は、IPPNは国内市場価格より安い1ケース当り20ドルで売っているにもかかわらず売れ残っていることである。

⑤ 太平洋岸に建設予定の加工工場

PPM社は、メキシコ最大の水産加工工場を太平洋岸のプエルト・マデロ (Puerto Madero) に建設を計画している。建設資金が3,000万ドルを超える大型プロジェクトで、この資金は政府関係機関、投資家及びデンマーク等からの融資による予定で、サウジアラビアの投資家からも融資を受けるかも知れない。

この加工工場は、缶詰、冷凍、その他加工品、フィッシュミール、魚油等の製造設備を備える予定である。PPM社は年間にマグロ製品55万ケースの製造を計画している。

⑥ イワシ缶詰工場からマグロ缶詰工場への転換

グアイマスにある、アリメントス・コンセントラドス・デ・グアイマス社 (Alimentos Concentrados de Guaymas (ACG)) と、

メキシコマグロ漁業協同組合 (Cooperativa Atuna Mexicana) との間で、マグロ170tの購入契約が成立し、イワシ缶詰製造ラインの一部をマグロ缶詰製造用に切り換えた。さらに、イワシ缶詰製造業者のSONMAR社とサルディナス・イ・ペリバドス社 (Sardinias y Perivados) の2社もマグロ缶詰製造を計画しており、PPM社はこれらの工場で製造されるマグロ缶詰を協定価格 (set price) で買取ることを保証している。

⑦ マグロ製品の在庫

PPM社総裁ホセ・ベジョット・カストロ氏 (Jose Bellot Castro) が記者会見の席で、マグロ缶詰輸出について、スペイン、イタリア、カナダと協議を進めているが、マグロ缶詰及び冷凍品の多量の在庫が交渉を困難にしていると述べた。同氏は、1982年6月末現在、冷凍マグロ4,000tとマグロ缶詰20万ケースの在庫をかかえていると言明したが、エンセナダのPPM社の附属工場にある大量のマグロ製品の在庫をかかえていることについては何も語らなかった。しかし、アメリカの海洋漁業局 (NMFS) は、IPPN社はマグロ缶詰40万ケースと、かなり大量の冷凍マグロの在庫をかかえているものと推定している。ところが、最近のPPM社のマグロ製品の在庫は1981年に比べかなり減っており、その理由は、政府の食料品価格の引下げ政策に従って、SE PESがマグロ缶詰を特別安値で市場に流していることによるものと思われる。

⑧ 漁業協同組合がマグロ缶詰工場の設立を計画

マグロ漁業者協同組合の1つであるフェデレーション・レジオナル・デ・コーペラティバス・ペスケラス・デ・バファ・カリフォルニア・ノルテ (Federacion Regional de Cooperativas Pesqueras de Baja California Norte) が、缶詰工場の設立を計画し、この計画に対しナショナル・ペスケロ・イ・ボルトアリオ銀行 (Banco Nacional Pesquero

y Portuario (BANPESCA) が9,100 万ペソの融資を承認した。

⑨ マグロ製品の輸出

メキシコ海外貿易事務所 (Mexican Foreign Trade Institute) のスペイン駐在所長ロベルト・フリードリッヒ氏 (Robert Friedrich) は、メキシコのマグロ製品がスペインに輸出されるようになり、メキシコの輸出業者に市場を解放していると報告している。しかし、その数量は明らかにしていない。実際には少ないものと思われており、1980年には3,000tを下廻るものといわれている。

⑩ マグロ漁業会社の大型投資

メキシコのマグロ漁業会社 (Compania Atunidos (CA)) は、4,700 万ドルを投じ、栈橋と収容能力6,000tの冷蔵庫の建設及び積載量1,200tのマグロ旋網漁船4隻の建造を進めている。マグロ旋網漁船はスペインで建造中で、2隻はすでに就航しており、残り2隻は1983年6月までに完成予定である。CA社はメキシコのシナロア州 (Sinaloa) に新しく建設されたトポロバンポ港 (Topolobampo) を根拠にして操業している。

⑪ マグロ製品の輸出

政府系のIPP社は、1982年中に冷凍マグロ1,500t、金額で150万ドルをイタリアへ、マグロ缶詰10万ケース、金額で300万ドルをカナダへ輸出したと発表した。

また、PPM社は冷凍マグロ1,500tをスペインに輸出すると発表した。

⑫ メキシコ湾のマグロ漁業

国立漁業研究所 (Instituto Nacional de Pesca (INP)) は、メキシコ湾におけるマグロ資源調査の5航海と開発調査2航海に必要な資金援助を行なった。現在、メキシコ湾において、キハダ8,000tから10,000tの漁獲が可能であると結論し、漁業者にマグロ延縄用漁具購入を勧めている。

⑬ メキシコのマグロ漁業とアメリカとの関係

メキシコ漁業大臣オヘダ・パウジャダ氏は、1983年1月マサトゥランでの水産業会の会議で演説し、アメリカに対しメキシコのマグロ製品輸入禁止措置を取り止めるよう説得する考えを示したが、しかし、メキシコの主権は妥協するわけにはいかないと述べた。

12. パナマのマグロ漁業

① マグロ缶詰工場建設の遅延

パナマのINFESCA社は、1983年よりスペインとの合弁事業でバカモンテ漁港にマグロ缶詰工場の建設開始を希望していたが、必要な資金の手当がつかず工事が遅延している。一方で、投資家達もマグロ缶詰等水産缶詰の市況がさえないことから、投資をちゅうちょしているといわれている。この工場は、マグロ缶詰40万ケースの製造能力を持ち、1984年末に完成が予定されている。

② 日本の全漁連調査団によるマグロ加工工場建設の可能性調査

日本の全漁連は、パナマ政府の要請によりマグロ加工工場建設プロジェクトの可能性について調査団を派遣し、すでに調査結果が報告されている。

13. バブア・ニューギニアとイタリアのマグロ合弁事業

ポートモレスビーのアメリカ大使館からの報告によれば、PNGの第1次産業大臣デニス・ヤング (Dannis Young) 氏は、PNGの20マイル水域内のマグロの有効資源量とマグロ缶詰製造に関する合弁事業設立の可能性について、イタリアの国際借款協会 ITAL-PESCA と協議のため、12月4日ローマへ出発した。この合弁事業によって生産される製品のヨーロッパでの販売を、イタリアの会社が担当する予定になっている。

これと同様な計画がアメリカの会社にも申込まれたのであるが、同社はこの資金計画では採算割れとなる恐れありとし、申入れを拒否している。

14. ベルーと日本のマグロ漁業協力協定

ペルーの3漁業会社、ペスケラ・アンドレ・マル・ペルアノ（Pesquera Andrea Mar Peruano）、エムプレサ・ペスケラ（Empresa Pesquera）及びツナラテン（Tunalatin）は、日本のマグロ貿易会社を通じて、15隻の延縄漁船を借りすることになった。これら延縄漁船は、ピスコ、サマンコとパイタを根拠地に予定している。日本側は1隻当たり10万ドルの用船料と出漁経費を受け取り、さらに、漁獲物の80%を買取る権利が与えられる。第1船は9月15日にピスコに到着している。

15. プエルトリコのマグロ缶詰工場

アメリカのカリブ海沿岸国機関（Caribbean Basin Initiative（CBI））は、カリブ海沿岸国と中部アメリカ諸国の援助を目的に、これら諸国からアメリカへの輸出品に対する関税の免除を含む各種の援助対策を計画している。すでに、プエルトリコ当局は、近隣諸国が缶詰製造を競争すれば、同国の5つの缶詰製造会社が痛手を受けるのではないかと憂慮している。特に、同国は年間4億ドルに達するマグロ缶詰を生産しており、アジア諸国のマグロ缶詰生産の拡大により競争激化を心配している。さらに、コスタリカもマグロ缶詰製造を計画しており、他のカリブ海沿岸諸国も缶詰工場建設の可能性調査を進めている現状からCBIの活動は重要であろう。

16. エルサルバドルのマグロ漁業

① マグロ製品の輸出

1982年に初めてマグロ製品を輸出し、上半期に約100tを輸出した。また、同国はフランスで建造されたマグロ旋網漁船2隻を購入した。

② スペインとの合併事業計画

エルサルバドル当局者は、マグロ旋網漁船隊の拡大を計画し、スペインの漁業者との合併事業の可能性について検討し、スペインから6隻の旋網漁船と漁業技術の提供の申入れを受けている。これら旋網漁船の操業基地は

プンタ・ゴルダ（Punta Gorda）漁港を予定している。

③ マグロ加工工場の建設

エルサルバドルのラ・ユニオン（La Unión）港においてマグロ冷凍能力40t/日を持つ冷凍施設と収容能力8,000tの冷蔵庫の建設が進んでいる。

この加工工場の建設工事は約1年遅れ、1982年9月までに完成の見込みである。

17. ソ連のマグロ漁業

ソ連は、1982年に2隻のマグロ旋網漁船を使用し、東部太平洋海域で操業している。この2隻の合計積載能力は2,600tである。

両船による漁獲量は明らかでないが、アメリカ海洋漁業局海外漁業分析課によると、1982年8月末現在で1,500t未満と推定している。また、ソ連はコロンビアと合併事業を行なっているようである。

18. 台湾のマグロ缶詰輸出の見通し

台湾の食料研究センター（Government of Taiwan's Food Research Center）の調査によれば、マグロ缶詰は輸出市場で最も期待がもて、台湾は年間2億ドル程度の輸出が可能であると報告している。

19. ウルグアイのマグロ漁業

ウルグアイのマグロ漁獲の現状は、混獲魚として水揚げされる程度であり、殆ど国内市場に向けられている。しかし、モンテビデオ港外では外国漁船がマグロ延縄漁業を行ない、従来はマグロの殆どをアメリカに輸出していたが、最近では、すし用の高級マグロを漁獲し日本に輸出しており、その金額は1,400万ドルに達している。

20. ベネズエラのマグロ漁業

① マグロ漁業の現状

ベネズエラは、東部太平洋海域においては第3番目のマグロ漁船所有国である。同国は、アメリカの造船所から最新式のマグロ旋網漁船6隻、積載トン数で7,200tの購入を進めている。

マグロ製品の輸出先は、主としてアメリカで、1982年上半期のアメリカへの輸出は1,950t、金額で160万ドルであった。

② マグロ漁業の急成長

ベネズエラの東部太平洋海域におけるマグロ漁業は急速に発展し、特に、マグロ旋網漁

船の輸入が進むにつれ、マグロ製品の輸出が急増し、1981年にはアメリカ向けの輸出が1,300万ドルに達し、1980年の300万ドルの3.3倍の大巾な増加となった。ベネズエラのマグロは高級品で、イタリア及び他の西欧諸国の市場にも進出している。

内外の情報は資料室で!!

国内、外国の最近の情報を剛堂会館一階展示資料室（千代田区紀尾井町）でお求め下さい。問い合わせにも応じます。

海洋水産資源開発センター

企 画 課

